

2014年12月14日 礼拝メッセージ

聖書：ヨナ書2章1～10節

説教：救いは主のものです

あらすじ

待降節の第三週目を迎え、ヨナ書が続けて見て参ります。

神はヨナに、「ニネベに行きなさい」と命じるのですが、ヨナは神の命令に背き、まったく正反対の方向に逃げるため、船に乗ることにしました。ところが、神は海に大嵐を起し、そのため船は沈みそうになります。ヨナが船の人たちを巻き添えにしてしまうかたちになってしまいました。ヨナは、覚悟を決めてこう言います。「私を捕らえて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。」

ヨナが海の中に投げ入れた途端、あれほど荒れ狂っていた海は静まりました。これが前回までのあらすじです。

1 ヨナ

1) 叫んだ

その後ヨナはどうなったのか。1章17節を読むと、ヨナは海に投げ込まれた後すぐに魚にのみこまれ助けられたかのような印象を持つのですが、どうもそうではなさそうです。5、6節にこうあります。「水は、私ののを締めつけ、深淵は私を取り囲み、海草は私の頭からみつきました。私は山々の根元まで下り、地のかんぬきが、いつまでも私の上にあります。」ヨナは大嵐の海の中でもがき苦しんだようです。

私たちは、海でおぼれるような事故に遭うことはほとんどないかもしれませんが、けれども、あるとき思いがけなく人生の荒海の中に

放り込まれてしまうことがあります。突然に大きな事故に巻き込まれた。健康診断で、予想もしていなかった重い病気が見つかった。信頼していた友人に裏切られた。愛する家族が突然に亡くなる。よく、目の前が真っ暗になるとよく言いますが、まさにそのとおりことが起きます。

私は若いとき、人生はどんな問題が起こっても自分の力で乗り越えて行くものである、そのために日頃から精神力を鍛えておかなければならない。そう思っていました。なので、できない人や、弱い人を見ると無性に腹が立ちました。けれどもあるとき、どんなにがんばっても乗り越えられない問題にぶつかってしまいました。首をつつたら楽になれるかもしれないと思うほど、精神的に追い込まれたこともありました。そのとき初めて、自分がいかに弱いものであるのかを知らされ、それまでの生き方が間違っていたことに気がつきました。

ヨナも、海に投げ込まれた当初は陸に向かって泳ごうと努力したと思います。けれども陸に近づくどころか、ますます海の深みに引き込まれ、息ができなくなります。おぼれているとき、冷静でいられる人はいません。だれでも「助けて」と叫ぶでしょう。ヨナもよみの腹の中から叫びました。いったいだれに向かって叫ぶのでしょうか。船に向かってでしょうか。でもあの船から自分は放り込まれたのです。船は自分を見捨てました。

2) 主を思い出した

であれば、だれに向かって助けを求めるのでしょうか。7 節にこうあります。「私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思いだした。」

ヨナは、神に対して腹を立てていました。ニネベの人々の所へ行きなさいと言われたとき、どうして自分があんな悪い人たちのために苦勞をしなければならないのか、そうか考えるとまったく理解できませんでした。もう神はまっぴらごめん、もう神のことなど忘れてしまおう。そう決心しました。そんなヨナが、「もう駄目だ、死んでしまう」と言う所まで追い込まれたとき、主を思い出し、神に助けを求めたというのです。

これと似たような話を聖書のどこかで聞いた記憶があります。あの放蕩息子の話です。父親がまだ元気なとき、父の財産を無理矢理に分けてもらい、そのお金で自由気ままに生活していましたが、お金を使い果たして食べるのにも困るようになったとき、父の所に戻って助けをもらった。そのような話です。

世間の常識から見ると、あの放蕩息子もヨナもあまりにも身勝手です。どんな顔をして父親の所に戻るといえるのか。どんな顔をして神に助けを求めることができるのか。なんと恥知らずな、と言われるでしょう。

3) 祈りは届いた

しかし神はどうでしょうか。「おまえはなんとも身勝手に恥知らずな男だ」と言ったのでしょうか。7 節後半にあります。「私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。」神はヨナのそばにいます。ヨナをあわれんでいます。大きな魚を備え、ヨナをのみこませ、救い出さなければならないと思われました。

私はいまから 21 年前、自分の口で「クリスチャンになる」と言い出し、生まれて初めて自分の意思で教会の門をくぐりました。それまでは、「なにか問題が起きても自分の力でなんとかする。神は口出ししないほしい。私は私の願うように生きるのだ。」そう考えていました。そんなふうにして、ずっと神に逆らっていたのです。そんな人間が、自分の手に負えない問題にぶつかったとき、助けてくださいと教会に駆け込む。なんとも身勝手な話です。しかし神はそう考えない。身勝手と思われるヨナを救い出します。身勝手な放蕩息子を救い、身勝手なことをしていた私も救われました。皆さんも同じでしょう。

さきほども申したとおりにヨナは、「勝手なことをしているニネベの人々は、神にさばかれ、滅んでしまえばよい」と言いました。ところが、そのことばは、やがて自分自身に跳ね返っていきます。あれほど憎んでいたニネベの人と自分は、結局の所それほど違いはなかった。そんなヨナでも神は救ってくれました。そうしたら返す言葉もありません。自分が間違っていました。

2 救いは主のものです

主は、ルカの福音書の中でこう言われました。「この時代は悪い時代です。しるしを求めているが、ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられません。」ヨナのこととイエスのことはつながっています。

主イエス・キリストは、十字架で死んで三日目の朝よみがえられました。その間、主は何をしていたのでしょうか。ヨナのことから教えられます。主は私たちが落ちていく最も低い所、よみという世界にまで降りて行かれました。水は、主ののどを締めつけ、死の苦し

みを味わわれました。主が背負われた罪は、神に顔向けができないほどの重さです。でも、主が死んでよみの底に下って行かれたとき、何をしたのでしょうか。ヨナは主を思い出して叫びました。主も叫んだのです。父なる神に向かって「助けてください」と叫んでいたのです。

父なる神は、なぜ主をよみがえらせるのでしょうか。自分の愛する子だからでしょうか。でも、主は父なる神に顔向けができないほどの罪をさ負われたのではありませんか。ヨナは主の姿を現していると言います。ヨナは神に顔向けができないほど逆らっていました。それでも主に叫んだら救われました。とすると、父なる神が主をよみがえらせてくださったのは、愛する子ということではない。どんなに神に逆らおうとも、どんなに悪を繰り返してきた者であろうとも、「主よ、助けてください」と叫ぶ者を神は決して見捨てない。神はそのような方なのです。だから父なる神は、主イエスをよみがえらせるのです。主は、私たちが通っていく道を歩まれました。神としてではなく、人としてさばかれました。だから主は人として叫ぶのです。「助けてください。」その叫びは必ず聖なる宮に届く。聖書はそのように約束します。

これは私たちにとって希望の光です。大きな問題にぶつかったとき、だれもが嘆きます。「もう手遅れだ。間に合わない。どうしてもっと早く気がつかなかったのか。もう終わりだ。」

でも主は教えてくださいます。どんなことが起きて、主の目には手遅れと言うことはありえない。いつでもまだ間に合う。たとえ、今日私たちのいのちが取られることになっても、十分に間に合う。望みはある。ただひ

とこと「助けてください」と叫ぶ者を、主は無条件で必ず救ってくださる。どんなにひどい悪を繰り返してきた者であってもです。信じられないでしょうか。ヨナも信じられませんでした。でもクリスマスとはそのような意味だったのです。主は、救いの手を差し伸べるために私たちのところに降りて来てくださいました。